

英国教育史研究から今日の英国教育研究者に問いかけるもの

高妻 紳二郎

(福岡大学)

2019年度シンポジウムは「英国教育史研究の軌跡と展望～歴史を紐解く時間」と題して福岡大学にて開催された。イギリス近代史、女性教育史の泰斗であられるお二方、松塚俊三氏（福岡大学名誉教授）と香川せつ子会員（西九州大学名誉教授）に登壇願ひ、実に濃密なシンポジウムとなった。両氏の報告については当日の内容に加除修正を施したものが先に収録されている。中村勝美会員（広島女学院大学）と高妻（福岡大学）が司会となり、松塚氏からは「イギリス労働者はなにをどのように学んだか、独学の文化——19～20世紀前半、学びの歴史性——」、香川会員からは「フェミニスト・ヒストリーから、ジェンダー、トランスナショナル・ヒストリーへ——イギリス女性教育史研究半世紀のあゆみ——」と題する報告をいただき、その後質疑応答を行った。このシンポジウムの趣旨は以下の通りである。

「日本における英国教育研究は、近年の大きな教育改革の影響が随所にみられることを受け、研究者の興味関心は細分化しつつも研究知見が豊かに蓄積されてきている。ただ、細分化するが故に「ではのかみ」と称されるように、部分的あるいは断片的な紹介にとどまることもある。もちろん、今日の英国教育をめぐる急速な環境変動を追いつつその性質を的確に把握する必要があることは言うまでもないが、矢継ぎ早の改革が実行されており、それぞれの功罪を、短期間で緻密に事前事後検証することはもはや困難である。とは言え、政治・一般行政レベルはもとより日本の教育システムの企画・実施プロセスにおいて英国の類似システムが参照されることもこれまでも数多く、日本へ応用可能な施策やその実施状況を随時紹介することもまた私たちの責務である。

かかる今日の状況のもと、歴史研究の成果が今後の教育を導く、欠陥を是正する、あるいは何らかの示唆を与え得るのかという視座に立てばそれはなかなか現実には困難ではあるが、歴史の延長線上に今日があり、それを「跡付ける」学術的な意義は極めて高いまま今日に至っていると思われる。英国の政治行政システムも長年の伝統を背景に有し、例え教育制度に関わる大規模な変革であっても、当の英国人（研究者）は泰然と臨んでいることに驚かされることもある。リーダーシップ研究や組織・カリキュラムマネジメント研究等が隆盛を誇る今日、歴史研究は英国本国においてもサッチャー改革の余波を受けて以来、財政抑制による制約もあり低調というべき状況にあった。日英教育学会でも久しく歴史研究をテーマとして取り上げていなかった状況に鑑みて、本大会では改めて英国教育史研究に光を当ててみたい。目まぐるしい変革が続き息つく暇も

ない今日であればこそ、英国の歴史的な文脈に改めて触れることで私たち英国教育研究者の「目が肥える」機会になれば幸いである。

そこで本大会は福岡大学で開催することもあり、英国史研究の重鎮である松塚俊三先生（福岡大学名誉教授）から英国教育史研究のだいご味を、そして香川せつ子会員（西九州大学）から永年の女性教育史研究についてそれぞれ講話いただくことにしている。改革疲れも看取される現在からいったん歴史を遡り、英国教育史研究の意義を再度会員で共有し、特有の伝統を味わえるようなシンポジウムになればと思っている。」

改めて両氏の略歴を簡単に紹介させていただこう。松塚俊三氏はイギリス近代史、民衆史、教育史をご専門とし、現在も九州歴史学研究会、イギリス教育史研究会、九州西洋史学会、比較教育社会史研究会等で精力的に活躍中であられる。『19 世紀イギリスの民衆と政治文化』（2004）昭和堂、『歴史のなかの教師——近代イギリスの国家と民衆文化——』（2001）山川出版社、R・オルドリッチ『イギリスの教育——歴史との対話——』（安原義仁氏との共訳）（2001）玉川大学出版部等、多数の著書、翻訳書を刊行されている。香川せつ子会員はイギリス女性教育史、女性と高等教育、ジェンダー等の領域をご専門とされ、『女性と高等教育-機会拡張と社会的相克』（香川せつ子、河村貞枝共編著）（2008）昭和堂、「ケンブリッジ大学における女性科学者の系譜——19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての時期を中心に——」（2015）西九州大学子ども学部紀要、「イギリスにおける教育史研究の潮流——ジェンダー、トランスナショナリズム、エージェンシー」/ジョイス・グッドマン著、香川せつ子、内山由理、中込さやか訳（2018）西九州大学子ども学部紀要等、多数のご業績をお持ちで、現在は科研で「女子高等教育のトランスナショナルな交流とネットワーク構築に関する歴史的研究」に精力的に取り組んでおられる。

Brexitをめぐる大混乱や短期間での首相交代など目まぐるしい変革が続き息つく暇もない今日であればこそ、英国の歴史的な文脈に改めて触れることで、私たち英国教育研究者が一息つく機会になればとの高妻個人の思いもあった。以下、当日の質疑応答を中心に整理しておきたい。

松塚氏からは、労働者階級の学びに社会主義がどう影響を与えたのかに係る質疑において次のような説明が付言された。学ぶことに意欲を持ち続けた労働者の学びを追うことは、上からの国家主義的な福祉政策に関連して「公助、共助、自助」の複合体論がかねてから議論されてきた文脈のなかで考えなければならない。日本でいう「公教育」の「公」の意味するところがイギリスとは大きく異なっていることを理解しておく必要があること、そしてイギリスでは、個人の希望と責任で行われる教育は規模にかかわらずそれはプライベートであるとみなされてきた分厚い歴史があること、総じて民間公共社会といった視点でとらえなければならず、すなわちイギリスでは公教育は国家が独占するものではないという理解である。イギリスには自律的な公共社会の担い手としての様々な集団的な努力を様々な分野で蓄積してきたという歴史があり、公共社会を担う国家以外のセクターが果たした重要な役割は看過できないとも指摘された。同時に今般のイギリス政治にも言及され、労働党にも諸派が混在することで様々な意見を吸収できる構造になっているのだとされた。

また、今日でもとりわけ社会史、教育社会学で引用されることが多い『ハマータウンの野郎ども』で描かれた非行の社会史をイギリス教育史に包含することは必要だけでもなかなかできて

いない。本書の翻訳者の経歴に照らして1960年代の荒廃した学校や生徒達から目をそらすことができなかつた、排除し得なかつたのだという解釈も示され、改めて参加者の興味を誘った。

歴史に学ぶ意義を講義する教育者の立場からの質問には、香川会員からは学生の「歴史離れ」を認めつつも今日の教育状況を分析する視点に立って伝える工夫を重ねている、また今般の学生の実態に沿うとすれば、教育史の講義に先立って世界史概説から入らなければならないというジレンマも披露された。さらに男子学生と女子学生の向き合い方にも差があるともされ、歴史を昔話と捉えられないように「ただ昔はこうだった」と解説するにとどまらず、歴史の講義だけではなく生涯学習論等の講義においても歴史の楽しさも同時に伝えねばという機会の提供を探ることが大切であるとの見解が示された。女性史研究会の主宰者としてのお立場から西洋経済史、労働社会政策史等を含みつつ学際的研究の意義を説かれ、フロアの会員はおおいに啓発されたものと思う。また、国際学会で日本人の研究者として成果を発信することを自ら取り組んでおられることにも敬意を表したい。

質疑は大学教育の現状にも話題が拡大し、置かれている大学教員を取り巻く諸事情の急激な悪化の中での歴史教育の在り方も変容を余儀なくされているとの心情も吐露された。松塚氏は、学生に「100年前の非常識が今日の常識になっていることが多いのだよ」、「今の常識が100年後には非常識になるのだよ」、「いまあなた達がとっているノートは100年後には古文書だよ」といった自己の現状を相対化することへの契機を与えることを意識してきたという経験を紹介された。素人でも構わないので歴史を議論しよう、語ってみようとの問いかけは政治史、経済史研究等も手掛けられた氏ならではの見解であった。両氏の報告を通して歴史の延長線上にある現在を憂う、意味深いシンポジウムであったと思う。